

内村鑑三とベルクソン：「閉じた社会」から「開いた社会」へ

SATO, Aki / 佐藤, 明

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

152

(発行年 / Year)

2022-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第528号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2022-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025242>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	佐藤 明
学位の種類	博士 (学術)
学位記番号	第 780 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 安孫子 信 副査 専任講師 西塚 俊太 副査 (学外) 東京大学名誉教授 鶴岡 賀雄

内村鑑三とベルクソンー「閉じた社会」から「開いた社会」へー

1. 論文の方法と意義

本論文では、内村鑑三(1861-1930)の生涯を貫く思想の展開を、フランスの哲学者ベルクソン(1859-1941)が『道徳と宗教の二つの源泉』(1932)(以下『二つの源泉』)において展開した「閉じた社会」から「開いた社会」へという考え方を援用して、一貫したものとして示すことが試みられる。内村とベルクソンは同世代ではあるが直接的関わりはない。ベルクソンの『二つの源泉』も内村の死後に出版されたものである。しかし本論文は、内村が著作においてベルクソンの思想に対して共感を示していることを一つの手掛かりにして、両者の思想には共通するものがあると主張する。内村に関する研究には、評伝研究の他に、その信仰を問うもの、聖書解釈を問うもの、社会活動を問うもの、「二つの J(イエスと日本)」という言葉に籠められた日本観を問うものなど、夥しい数が存在しており、なかにはすでにベルクソンとの共通性を指摘するものも存在している。しかしそうした先行研究の多くが、「二つの J」に象徴される、さまざまな亀裂に満ちた内村の生涯を貫く思想を、一貫したものというより、丸山真男が「内村の逆説」(『忠誠と反逆』)と呼ぶように、矛盾したものと見ようとするのに対して、本論文では、内村自身の「武士道の上に接木されたる基督教」という言葉の「接木」の語をきわめて積極的に、ベルクソンが『二つの源泉』で展開した「神秘主義」の思想とつなげて解釈することで、日本を語り、世界を語り、社会を語り、信仰を語り、最後に無教会を唱道するに至る内村の精神の活動の全体を、一貫した思想の実践と主張するのである。内村自身の「然り、余は神秘家なり」という言葉、これが本論文の最終的な到達点となる。

2. 論文の目次

目次

まえがき	1
------	---

研究ノート

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第1節「閉じた道徳」と「開いた道徳」・・・・・・・・・・・・・・3
①習慣—知性が本能を模倣するということ
②「閉じた社会」
③「神的人間」の招きと「開いた魂」
④「情動」と「駆動力」
第2節「静的宗教」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
①仮構機能としての「静的宗教」
②「静的宗教」の特性
第3節「動的宗教」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
①「静的宗教」と「動的宗教」
②「キリスト教神秘主義」
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第1部 内村鑑三の「武士道の上に接木されたる基督教」とベルクソンの「開いた社会」

第1章 内村鑑三の『余は如何に基督信徒となりし乎』について—日本の「静的宗教」から西洋の宗教へ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第1節 儒教とキリスト教・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第2節 第一の回心—日本の「静的宗教」から西洋の宗教への目覚め・・・・・・・・・・16
①文明開化的キリスト教
②信仰生活
③日本への愛着
第3節 アメリカ社会への失望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
—日本の道徳と西洋の道徳の比較
第4節 第二の回心—「閉じた道徳」から「開いた道徳」へ・・・・・・・・・・・・・・23
①慈善行為における苦悩
②回心
③神の共同体
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第2章 内村鑑三の『代表的日本人』—西洋の「閉じた道徳」に対する日本の道徳（武士道）

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第1節 二つの版の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
①1894年版における評伝以外の作品について
②1908年版の変更点について

第 2 節 日本人の国民性とキリスト教との類似と西洋近代の問題点	34
第 3 節 西洋近代の悪を克服する源泉としての日本の道徳	37
第 4 節 キリスト教受容が開く日本の可能性とその日本が開く世界の可能性	40
おわりに	43

第 3 章 内村鑑三の武士道からキリスト教への飛躍—〈閉じた道徳と開いた道徳の間〉から「開いた道徳」へ

はじめに	43
第 1 節 ベルクソンにおける「閉じた社会」のしくみ	45
第 2 節 内村における回心	46
第 3 節 内村におけるカント批判	49
第 4 節 「閉じたものと開いたものとの間」としての武士道	51
おわりに	52

第 4 章 内村鑑三の武士道と新渡戸稲造の武士道—〈閉じた道徳と開いた道徳の間〉と「閉じた道徳」

はじめに	54
第 1 節 内村の十字架のキリスト教と新渡戸の悲しみのキリスト教	55
第 2 節 内村の武士道と新渡戸の武士道の違い	58
①内村のアメリカでの回心による武士道観の変化	
②個を重視する内村の武士道と社会を重視する新渡戸の武士道	
第 3 節 内村による西洋のキリスト教批判に基づく新渡戸の武士道への批	68
第 4 節 台木としての内村の武士道と残り香としての新渡戸の	71
おわりに	75

第 2 部 内村鑑三の無教会とベルクソンの神秘主義

第 1 章 神秘主義について

はじめに	76
第 1 節 ベルクソンにおける神秘的生	76
第 2 節 内村における「神秘的経験」の深化	79
①第二の回心以後	
②不敬事件	
③不敬事件以後	
おわりに	91

第 2 章 神秘主義と近代の諸問題

はじめに	91
第 1 節 民主制について	92

①ベルクソンの場合	
②内村の場合	
第2節 機械化について	97
①ベルクソンの場合	
②内村の場合	
第3節 戦争について	104
①ベルクソンの場合	
②内村の場合	
おわりに	117
第3章 神秘主義の実践的活動としての無教会—「開いた社会」への道	
はじめに	117
第1節 ベルクソンにおける「神秘主義」	119
第2節 内村の無教会の特徴	121
①無教会の展開	
②内村の信仰と無教会	
おわりに	133
あとがき	135
引用文献・参考文献	144

3. 各章の概要と評価

論文の各章の内容とそれの評価については、次の通りである。

まず内村の思想を理解するためにベルクソンを援用するのに際して、論文としては異例のことであろうが、論者自身がベルクソンの思想をどう理解したかの研究ノートが「はじめに」として置かれている。第1節では、ベルクソンが言う「閉じた社会」と「開いた社会」とは何か、第2節では、「閉じた社会」を支える「静的宗教」とは何か、第3節では、「開いた社会」を支える「動的宗教」は何かを示され、特に第3節では、「神秘主義」とその三段階、すなわち、「脱（忘）我」と「闇夜」と神との合一が説明される。以上、研究ノートはベルクソン哲学の正確な理解を示している。

第1部第1章では、内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』が扱われ、日本対西洋の枠組みにとらわれがちな、同書の従来の読解の、ベルクソンを援用しての見直しが図られる。第1節では、第二の回心を経験した内村が、自分が幼少期に受けた儒教教育をキリスト教との比較でどう捉えているかが示される。第2節では、内村における第一の回心は、〈多神教的な一つの「静的宗教」（神道）から一神教的なもう一つの「静的宗教」（アメリカ・プロテスタンティズム）へ〉の回心にすぎなかったと主張される。第3節では、期待を抱いて渡米した内村が、「静的宗教」に支えられた「閉じた

道徳」から成るアメリカに失望し、それとの比較で、日本の道徳を評価したと説かれる。第4節では、内村にとってアメリカでの第二の回心は、「閉じた魂」から「開いた魂」への飛躍であったと主張される。救いは人間の行為によるものではなく神からの絶対的な働きかけ、神の愛によるのである。こうして論者が主張するのは、同書の主題は「日本」対「西洋」ではなく「閉じた道徳」対「開いた道徳」であるということである。すなわち、(英語で書かれた)同書が意図するのは、ベルクソンの「動的宗教」に当たるキリストの十字架による贖罪の教えを、日本に知らせると共に、西洋に対しても思い起こさせることで、全世界を一致させようとするものだったということになる。以上、第1部第1章はベルクソンの枠組みを用いることで、同書の従来日本対西洋という枠組みでの読解を解体することに一定成功している。

第2章では、内村の『代表的日本人』について、ベルクソンを援用しながら、日本を誇示するものととらえがちな同書の先行研究の見直しを図っている。第1節では、内村が義戦論をとっていた1894年に出版された版と、非戦論をとるようになって改訂された1908年版の違いが考察される。第2節では、同書が、1894年版においても1908年版においても、取り上げる五人の日本人の〈利他主義〉と〈精神主義〉が、「閉じた社会」である日本において突出しており、同じく「閉じた社会」である西洋近代の〈利己主義〉と〈物質主義〉に優っていることを示している、と主張される。第3節では、同書において内村は、五人の日本人の道徳の出どころが、自尊心と滅私奉公を不可分に結びつける〈利他主義〉においても、質素・儉約を説く〈精神主義〉においても、彼が薫陶を受けた武士道であると見なしている、と指摘される。第4節では、内村は武士道を高く評価している一方で、それが自らの共同体を越えた「人類愛」となるためには、そこにキリスト教が接木される必要があると考えていることが示される。こうして論者に従えば、同書は、日本を誇示するものではなく、キリスト者としての内村が、「閉じた社会」に陥っている世界に対して警鐘を鳴らしつつ、日本が開かれることによってそれを打開しうることを主張するもの、となる。以上、第1部第2章は、ベルクソンの枠組みを用いることで、同書のいわば開かれた読みの提示に成功している。

第3章では、内村とベルクソンの類似を同じく指摘する前田英樹の先行研究を批判的に取り上げて、「二つのJ」に関して、武士道がつながる「祖国愛」はそのまま「人類愛」とはならないことが主張される。第1節では、前田の不十分な点が、「閉じた社会」が自己防衛的であることについては述べているが、それがなぜ生まれるのか、それを打ち破る契機が何なのかという点については十分には述べていない、と指摘される。論者によれば、習慣を破る「情動」の契機が十分には語られていないのである。第2節では、内村の第二の回心は、単に表面が動揺するだけの「情動」による第一の回心と違い、深部が震撼する「情動」によるものであることが確認される。その結果として、第二の回心は、「閉じた道徳」から「開いた道徳」への移行であったと改めて主張される。第3節では、内村が行っているカント批判が吟味され、それが、第二の回心によって至った「開いた魂」の立場から、「開いた社会」に至るにはキリストの十字架が不可欠であることを主張するものであった、と主張される。第4節では、内村において武士道は「開いた社会」への可能性を持つものであるが、それはむしろ、ベルクソンが言う「閉じた魂と開いた魂の間」の「開かれてゆく魂」に当たるもので、ベルクソンが

エピクロス派やストア派の観想的生に見たものに重なる、と主張される。ベルクソンに従えば、エピクロス派やストア派は、キリスト教がそれらに接される台木、なのである。以上、第1部第3章は、内村において「祖国愛」はそのまま「人類愛」につながると見る前田の解釈は、見直されなければならないと、一定説得的に主張しえている。

第4章では、「武士道の上に接ぎ木されたる基督教」という表現のそもそもの出どころである新渡戸稲造『武士道』に見られる武士道と、内村の武士道とが、比較して論じられる。内村が新渡戸の『武士道』を美しいとしつつ、他方でそれを「基督教化された武士道」として批判的にとらえている真意が検討される。第1節では、内村の基督教が十字架の基督教、新渡戸の基督教が悲しみの基督教とされていることについて、両者が基督教を自分のものにしていく過程で、「閉じた魂」から「開いた魂」（罪からの解放）への転換の契機がどこまで見られるかが考察される。そして、新渡戸においては、内村に比べて、転換の契機が弱いことが指摘される。第2節では、両者の基督教受容の違いが、武士道観の違いとしても表れていることが示される。その際に加藤信朗における新渡戸『武士道』の批判が援用されており、内村の武士道では自己保存を脱して正義を追求する個としての武士道が追求されるが、新渡戸の武士道では、その社会体制を維持する面が重視されていることが指摘される。第3節では、両者の武士道観の違いが、内村をして新渡戸の『武士道』を「基督教化された武士道」と言わしめたことについて考察が行われている。内村が「基督教化された」とする時の基督教とは、内村が本来の基督教の輝きを失って社会体制維持の道具と化していると考えた基督教を表しているとし、それが新渡戸の『武士道』についても言えることを、そこでの「廉恥心」や「忠義」についての記述から、確認している。第4節では、内村と新渡戸の武士道が基督教と結局どう関係していたかが確認される。内村では「閉じた道徳」が明確に批判されつつ、武士道は基督教の台木として生きて働くものであるのに対して、新渡戸では「閉じた道徳」の批判は不明確で、武士道は「残り香」であり基督教の台木とならないと主張されていることが確認される。こうして内村において武士道は「閉じた道徳と開いた道徳の間」にあるとして、新渡戸の武士道は「閉じた道徳」にとどまっているのであり、そこから内村の新渡戸『武士道』批判も生じていると結論づけられている。以上、第1部第4章で展開される、武士道をめぐっての、内村と新渡戸との比較論は非常に説得的なもの認められる。

第2部では、ベルクソンが「開いた社会」を支える「動的宗教」において最も重視した「基督教神秘主義」が内村の活動にどのように見られるのが確認される。

第1章では、ベルクソンにおける道徳と宗教の関係と「神秘主義」の定義が述べられ、その後、それと内村の活動との対応が示される。第1節では、まず、「神秘主義」の起源が、ベルクソンが道徳教育について行っている「躰の道」と「神秘的生の道」との区別にあること、宗教の介入が道徳に求められる場合にも、教理によらず、「解釈の加わる以前の経験」すなわち「神秘的経験」によっていることが示される。次いで、「動的宗教」の内でも「基督教神秘主義」に即してベルクソンが行っている、その経験の三段階の過程が、「脱（忘）我」と「闇夜」と神との合一の順で、改めて確認

される。第2節では、内村における神秘主義の流れが、第二の回心が出発点（「脱（忘）我」）であり、その後、不敬事件の試練（「闇夜」）を経て、『聖書之研究』の創刊以降「無教会主義」に至るまでの活動（神との合一）に至る、と主張される。以上、第2部第1章は、ベルクソンの言う「神秘主義」をまず置いて、それに即して、神秘家内村をその生涯の事実即して概観するもので、概観としては認め得るものとなっている。

第2章では、ベルクソンが「神秘主義」の観点から行っている近代社会の諸問題についての考察が、内村が行っている近代社会に対する問題提起と比較され、そこでの共通性から、神秘家内村がさらに確認される。第1節では、民主制について、ベルクソンは民主制を「閉じた社会」から越えて出ている唯一の政治思想とするが、人間には限界があるため、それが単に抗議のために用いられて現実的な解決をもたらさないことや、一部の人の利益への屈曲を招く恐れがあると指摘していることについてまとめ、内村も、西洋諸国に追いつくために民主制を取り入れた日本について同様の懸念を有していたことが示される。第2節では、機械化について、ベルクソンは機械化を評価しながら、それが自然破壊や格差の拡大をもたらしていることを問題としているが、内村も文明を善きものとしながら、それが適切に用いられないことによる弊害を指摘している、と指摘される。第3節では、戦争について、まず、ベルクソンも内村も戦争を支持した事実はあるものの、その際には、それはあくまでも利己主義や物質主義に抗うことからのものであった、と確認される。また、ベルクソンが戦争回避の具体的方法として外国語の習得や国際機関の働きをあげ、さらに戦争の根本的要因は人間の所有欲だとしている点でも、内村と共通する、と指摘される。さらに、ベルクソンが近代社会の諸問題の根本的解決は「神秘主義」によるとしていることは、内村がキリストの十字架を第一としている点と共通である、と結論づけられている。以上、第2部第2章は、ベルクソンの言う「神秘主義」と内村の神秘主義を、それぞれが行っている時代の諸問題への対応で比較考量するもので、両者の共通性を主張することに一応成功している。

第3章では、内村の「無教会」の活動がベルクソンの言う「神秘主義」の実践であることが主張される。すなわち、ベルクソンが「開いた魂」において積極的に見る「無」は、ベルクソンが他所で批判する形而上学における「無」ではないことが示され、そして、内村の「無教会」における「無」はまさにベルクソンの言う前者の「無」であって、それゆえに、「無教会」は「神秘主義」に結ばれている、と主張されるのである。第1節では、ベルクソンの「キリスト教神秘主義」による「開いた社会」とは、「人類が個体としての動性を獲得すること」であり、そこでの「社会」は、神秘家がキリストの「模倣者」として立ち、今度は自らが模範となって「模倣者」を従えるという形で、内的にのみつながるものであることが示される（外的には「無」）。第2節では、内村の「無教会」についての言葉を通して、内村の「無教会」とは教会を無くせと積極的に主張するものではなく、ただ教会を度外視するものであることが主張される。それは内的つながりを重視することで、結果として外的の「無」を導くものなのである。こうして、「無教会」とは、内村の主義主張の産物というよりも、イエスという存在に招かれた内村が、そのイエスに導かれて巧まらずに生み落としたものであり、神秘家内村がおのずから至り付いた場所ということになる。こうして「無教会」ということにおいても、内

村は優れて神秘家であった、と結論されるのである。以上、第2部第3章は、内村の無教会主義について、ベルクソンの「神秘主義」に従っての、説得的な解釈を提示することに成功していると思なされうる。

4. 論文全体の評価

本論文は、「二つの J」(Jesus と Japan) を筆頭に、さまざまな亀裂と飛躍に満ちた思想家内村鑑三の思想の展開に、ひとつの一貫した理解をもたらすことを目指すものである。その際に、本論文は、フランスの哲学者ベルクソンの最晩年の著作『二つの源泉』で展開される「閉じたもの」から「開かれたもの」へという進化の考えと、その進化の到達点で示される「神秘主義」の考えを手掛かりとして用いている。内村とベルクソンの両者は同時代人ではあるが直接の交渉はない。内村は著作を通じてベルクソンを知っており、大方、好意的に語っているが、ベルクソンからの直接の思想的影響を語ることはできない。ということで、内村の解釈にベルクソンを援用することは本論文論者のまったく外からの独創であって(ただし、内村をベルクソンと突き合わせることにしては、ここまで徹底したものではないが、前田英樹氏の先例がある)、それがどれほど精緻に、かつ成功裏に行われたとしても、それは何かを証したということにはならず、高々、一つの仮説を提供したということに留まるのである。そもそも、丸山真男が、内村自身の言葉(「私には矛盾が多い」)も引いて、内村を『忠誠と反逆』のはざまに取って置くとき、その内村に一貫したものを求めること自身が、あるいは暴挙と呼ばれるべきことなのかも知れない。しかるに、論者は、『内村全集』(全40巻)を繰り返し読み直すことを通じて、この「矛盾」を貫いてさらにその奥にある一つの内村に感じ取ったのであり、その一つのをぜひとも取り出したいと欲したのである。その中で出会ったのがベルクソンであった。論者はごく短期間にベルクソンの『二つの源泉』の理解を果たし、そこで展開される、「閉じたもの」から「開いたもの」への、最後には「神秘主義」に至る運動が、思想家内村自身を貫いている一つのものと、重なり合うとの直観を得たのである。こうして、論者は、ベルクソンを手掛かりに、内村の思想を読み解く作業を開始、遂行したのである。その成果が本論文である。それはほぼ成功裏に行われたと言っている。内村問題としてこれまで、絶えず、様々に論じ続けられてきた諸点に、本論文は一定の整理と見通しを与えることに成功している。たとえば、第一の回心と第二の回心の関係、義戦論と非戦論との関係、不敬事件と愛国心との関係、新渡戸の武士道と内村の武士道との関係、伝道と無教会主義との関係、ひとことで、大きくは、内村における、Jesus と Japan という「二つの J」の関係に、一貫した解釈を与えることに成功している。本論文によれば、それらはすべて、内村自身の「然り、余は神秘家なり」の言葉が指し示す、「閉じ」と「開き」という二つの契機を有する一つの運動の中に、位置づいて行くのである。

以上の評価にもかかわらず、ただ本論文に残る課題も指摘しなければならない。まず思想史の博士論文として、内村自身のそしてベルクソンの主要テキストということでは、やはり原著が然るべく扱われるべきであったであろう。また、ベルクソンの最後の著作『二つの源泉』は、それに先立つベルクソンの仕事を含んでいる。さらに、内村が語る儒教や武士道は、それに先立つ日本思想史でのそれらの振る舞いを含んでいる。思想的厚みということで、かりに本論文がそれらへの準備も踏まえてのものであったならば、その成果もより大きなものとなったであろうことは否定できない。加えて、

内村その人に関して、彼の社会的活動や、伝道者としての仕事、聖書解釈の仕事などにおける神秘家振りがさらに具体的に扱われていれば、本論文の説得性もさらに高まったであろうと思う。以上は本論文の不十分さと言わなければならないが、にもかかわらず、本論文の達成は不十分さをはるかに凌駕するものであると認め得る。

5. 公開の口述試験

本学学位規則第 19 条により、口述試験を 2021 年 12 月 5 日に公開の場で行った。佐藤氏からは論文内容に関して適切な説明が行われ、審査小委員会委員からの質問に対して的確な回答がなされた。その結果、審査小委員会は口述試験の結果を合格と判断した。

6. 結論

以上により本審査小委員会は、佐藤明氏によって提出された学位請求論文「内村鑑三とベルクソン — 「閉じた社会」から「開いた社会」へ —」を優れた研究であると評価し、佐藤明氏が博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。

以 上